

ちよつと妖しげな雰囲気も 吉祥寺の魅力です



むさしの Talk 渡辺 哲さん

渡辺 哲 (わたなべ てつ)

1950年、愛知県常滑市出身。俳優。東京工業大学中退後、30代後半まで舞台俳優として経験を積む。
1990年、ハリウッド映画『アンボンで何が裁かれたか』(スティーブン・ウォーレス監督)で本格的な映画デビュー。
個性派俳優として評価は高く、北野武、伊丹十三、岩井俊二といった監督たちの作品に数多く出演してきた。
2012年にはヴェネチア国際映画祭でマルチェロ・マストロヤニ賞を受賞した『ヒミズ』(園子温監督)に出演。

映画、テレビ、舞台に大活躍中の俳優、渡辺哲さん。
名脇役として強い存在感を放つ渡辺さんですが、役者としての自分を確認できるのは、武蔵野での舞台や稽古の時間になりました。

初めて吉祥寺を訪れたのは中学2年生のとき。当時は喫茶店だった「ルー」で生まれて初めてホットドッグを食べたのを覚えています。昭和44年に高校を卒業して上京し、吉祥寺で下宿するようになりました。親戚のおばさんが下宿屋を営んでいて、兄も僕も吉祥寺で学生時代を過ごしました。近鉄デパートの裏に銭湯があって、下宿の仲間と一緒に風呂おけを持って通っていました。帰りにはルーに寄って、パンの耳をもらって、下宿で焼いて食べる。うまいんだなあ。下宿の近くで火事があったときは、布団に部屋のテレビとパンの耳を包んで逃げました。仲間からは、「お前はそんなにパンの耳が大切なのか」と笑われました。

大学を中退して、芝居を始めてしばらくの間は吉祥寺を離れていましたが、20代の終わりに戻ってきました。人つて不思議なもので、青春時代を過ごした場所に戻ってくるものなんです。もう吉祥寺から離れたくないですね。今でも、年に1、2回は舞台をやりますが、昨年は吉祥寺シアターでひとり芝居『校長失格』を上演しました。ひとり芝居はとても大変ですが、役者としての確認ができる。仕事ばかりしていると、金属疲労のように知らない間にいろいろな能力が落ちていく。舞台はそれに気付かせてくれるんです。

公演前は、中町にある中央コミュニティセンターで朝から晩まで部屋を借りてセリフを覚え、稽古をする。井の頭公園もいいですね。自宅から、セリフを覚えながら2時間ぐらいかけてゆつくりと歩きますよ。その日の公演が終わると、大抵、サンロードにある居酒屋へスタツプやお客さんと飲みに行くんです。

吉祥寺はとにかく住みやすい。こんな狭いエリアにこれだけの店がある街もほかにはないんじゃない? 欲を言えば、昔の雰囲気を残す小さなお店になんとか生き残してほしい。新しいお店ばかりになつてしまうと、何だか健全すぎてつまらない。ちよつと妖しげな雰囲気も吉祥寺の魅力ですからね。



PRESENT

今回取材した渡辺哲さんの直筆サイン入り色紙を抽選で5名様にプレゼント! 詳しくは本誌をご覧ください。

